

CONTENTS

- ◆矢作川流域のタケ、ササについて その2
- ◆わが庭の宝物
- ◆アサギマダラに魅せられて
- ◆今月の一枚
- ◆今月の調査風景
- ◆編集後記

URL <http://www.city.toyota.aichi.jp/yahagi/>

矢作川流域のタケ、ササについて

その2

三津井 宏

私は音楽が苦手だが20歳からギターを、50歳からオカリナ、さらに55歳頃からタケを使ったケーナ、尺八、アンタラ、サンポーニア、横笛を作り始めている。

私はなるべく多くの子供や大人が矢作川に関心を持ち、足しげく通いつめるようにするには、メダケ、ヤダケなどを材料として作る笛、アンタラ、サンポーニアを普及させるのが一番であることに気が付いた。サンポーニアは「コンドルは飛んでいく」、「花祭り」などの曲の演奏には欠かせない楽器であるが、日本における普及率は非常に低い。もともとペルーなどの本場ではカーニャ（日本語では陸アシと呼ばれる）という名前の、アマゾンの中流域に生息する植物から作られる。ペルーの貧しい村ではサンポーニアを入手できない子供たちはアンタラで我慢するが、アンタラを人数分入手できない場合はそれを分解して何人かで演奏を楽しむという。この話を聞いたとき、日本の子供たちは有り余る程の材料に囲まれているのにサンポーニア、アンタラの良さを知らないのがとても残念であった。

そこで数あるタケの笛の中でサンポーニア、アンタラの製作及び演奏の指導に下手を顧みず乗り出すことになったのである。平成15年度に豊田市自然観察の森で開いたサンポーニア製作、演奏の講習会は定員20人を軽くオーバーする盛況であったので16年度、すなわち平成17年2月27日（日）は定員30人を考えている。

私が仲間を集めて作った竹笛クラブは当初10

人ほどのメンバーが、今はわずかに3人に減ってしまった。私を含めたこの3人が青少年の健全育成と中高年の生きがいのために頑張っているのに関心のある人は2月27日（日）に自然観察の森の研修室に来て下さるようお願いする。

最後になったが私はサンポーニアで13本、15本の2種類、アンタラは5本、6本、8本の3種類のを指導できる。参加人数や年令、時間的余裕などに応じて対応できる。大勢で演奏するのもたった一人で演奏するのも楽しい。とくに孤独を癒す目的で使おうとするならばこれに優る楽器は見当たらないと言っても過言ではないだろう。

魚とりと同じくらいに人間を川に引き寄せ、同時に生態系を保全するという活動にも繋がるサンポーニア、アンタラ作りをこれからも広めようと思っている。



サンポーニア普及に向けて頑張っている3人組(右端が著者)

(みつい ひろし、オカリナ工房ひろべえ 主人)

わが庭の宝物

梅村 諄二

わが家は愛知高原国定公園内にある。目の前を矢作川が流れ、裏には山並みが続きその多くが保安林に指定されているので、半世紀以上前と比較して自然の変化は比較的少ない。豊田市の北部地域の山間部の入り口に当たり、住宅も矢作川に沿って点在するのどかな地域である。わたしはここに生まれ育ち、四半世紀近く生活し、わが庭を見続けている。戦後60年の間に変わったことと言えば、少子化と高齢化が進み、かつて谷間に広がっていた水田とそこに続く里山が放置され荒れていること、谷に沿ってスギ・ヒノキが植林され針葉樹林が増加していること、裏山の高圧線の下森が十数年に1度ぐらいの割合で切り倒されていること、47災害以後小川がコンクリートの三面張りになったこと、そして矢作川の水量が大幅に減り、降雨後の濁りが長期化していること等である。



サツキの花を訪れたギフチョウ

な動植物が見られる。わが家を中心として百メートル四方にも植物ではヘビノボラズ、シラタマホシクサ、鳥で

時代とともに若干の変化が続いているが、都市化の進んだ地域と比べれば、まだ自然は豊富で、何世紀も前から生き続けてきた貴重



ギフチョウの食草 スズカカンアオイはヤマセミ、カワガラス、昆虫ではギフチョウ、オオムラサキ、ヒメタイコウチ、魚ではホトケドジョウ、シマドジョウ、アカザ等が観察できる。これらは何れも環境省・愛知県のレッドデータブックの掲載種、豊田市の配慮種である。金銭では買えないわが家の庭の貴重な宝物である。この付近にはまだ豊かな自然が残っており、シーズンになるとカメラ、双眼鏡、各種網類、野帳等を抱えた研究者や愛好者が頻りに訪れる。無断駐車、作物の踏み荒らし、調査や採集のマナーの悪さ、煙

草の吸殻やボトルのポイ捨て等で地元の人たちとのトラブルが目につくこのごろである。

ヘビノボラズ……山田に沿った湿地に広がる。耕作していた時代は年に何回も刈り取っていたが、最近では放置されているので、70~80 cm大のものが多い。

ギフチョウ……食草のカンアオイ属は比較的多い。この付近では4月に発生するが、年により発生数に差がある。成虫はスミレ類やサツキなどの花に集まる。

オオムラサキ……食草のエノキの大木が矢作川の河畔に多い。この付近では6~7月に見られる。主に樹液に集まるがクサギ、クリなどの花にも集まり、窓を開けておくと家の中まで入ってくる。ヤマセミ……矢作川の左岸にマダケ林が1 km以上続くところがある。その川面に傾いた竹林のトンネルの水面近くを空中滑走する。滑走後は同じ木の枝にとまることが多い。

カワガラス……この付近から上流は平瀬と早瀬が交互に続く。早瀬から頭を出している岩から水中に飛び込んで餌をとっている姿を頻りに見かける。水面を低く飛行する。

ホトケドジョウ……冷水性魚類で小川の最上流に生息するが、集中豪雨等による増水やがけ崩れ等があると個体数が激減する。山田の耕作放棄も個体数減に関係する。

これら以外にも多くの貴重な動植物が見られるだけに、今後どのようにして保護していくかが最大の課題である。豊田市の中央部から南西部にかけて開発が進み、豊かな自然に恵まれているのは



ヤマセミ (猪狩 敦史氏 撮影)

北部から東部にかけてが中心になっている。住宅地開発や工場誘致、廃棄物処理場、高速道路等がすぐ

そこまできている。多様な生物相に恵まれている地域は、人の生活がより安全だと言われる。今後取り組まなければならない課題は、谷間に広がる山田跡の湿地管理とその周辺の里山の間伐や枝打ち、貴重な動植物や各種食草の保護、水辺の産卵場や各種動物の隠れ家の保護、乱開発防止や各種災害後の早期復旧、マニア等による乱獲防止、自治区内の自然保護意識の向上と協力体制の確立などである。自治区内では小学校の28年にわたる矢作川・飯野川の透視度調査がもとになり、愛護会も設立され、自然保護意識も高まっている。自然保護や環境問題はさまざまな要素が関係しているので市民、行政、企業、各種団体等が連携して、長期保全計画を作成し、行動していくことが鍵に



冷水性魚類のホトケドジョウ

なる。人と自然が共生していくためには、開発と保護をどのように調整していくかさまざまな立場の人が集まり、知恵を出し合う機会が到来している。

(うめむら じゅんじ、豊田市矢作川研究所 所長)

アサギマダラに魅せられて

安藤 晃

わたしがアサギマダラに初めて出会ったのは、今から10年以上前に高野山に行った時のことだ。その時、美しく、優雅に舞う蝶を目のあたりにし、この蝶に興味を持ち、図鑑等で調べたりしてアサギマダラ（マダラチョウ科）であることが分かった。

渡りをする蝶として知られ、遠くは喜界島・与論島・個体によっては台湾まで渡ることが確認されており、南下途中の飛来地として高野山付近も訪れているとのことだった。この体ではるか南まで渡りをする事に対して、「なぜ」このような行動をするのか、「どんな」花に吸蜜するのか、渡りをするためのエネルギー源は「なに」か、など疑問点が多く謎めいた蝶であった。

豊田市青木町の我が庭は雑草が多く、手入れもしていないが、秋にはマリーゴールドの黄色、ダンギク・サルビアの紫色、シュウメイギクの白色、ダリア・バラの赤色、ハギ・ヒメツルソバ・タイムの桃色、ホトトギスの紫と白色、そしてフジバカマの薄桃色など色とりどりの花が咲き誇る。平成16年10月2、3日の両日、その中にどこかで見たことのある美しい蝶（アサギマダラ♂前翅長約50mm）1頭が、フジバカマで吸蜜しているのを見

つけた。近づいても飛んでは行くがすぐに戻ってきて、他の花に目もくれないでまたフジバカマで吸蜜し、3時間以上も離れようとしない。カメラを向けても吸蜜に夢中になっているので、余程この花が気に入っているのだろう。10月11日にもアサギマダラ1頭がフジバカマで吸蜜していたが、羽の破れている場所が違うので、先週の個体とは違うようだ。この蝶にはまだまだ分からないことや知りたいことがいっぱいある。調べれば調べるほど謎が深まる蝶である。



フジバカマで吸蜜中のアサギマダラ

(あんど う あきら、伊那谷自然友の会 会員)



今月の一枚

ニホンアカガエル

▶卵塊—豊田市自然観察の森にて
(2004年2月28日)

▼若いカエル—豊田市古瀬間町
(2004年6月13日)



このカエルの産卵は早春に行われ、観察の森では2月中旬ぐらいから観察できます。

吉鶴 靖則 撮影

今月の調査風景

12月15日 (水)

研究所セミナーに立正大学の谷口智雅さんをお招きして、「文章記載・景観にみる東京の歴史的な水環境の復原」というテーマでお話し頂きました。膨大な数の文学作品を参照して見出された、島崎藤村や井伏鱒二といった著名な文人による東京の水辺の風景描写や、そこから読みとった水質汚濁や流れの変化、地下水位の低下、水利用や土地利用などの変化はたいへん興味深いものでした。東京だけでなく、日本各地の過去の風景が紀行文

などの形で書き残されているそうです。矢作川流域のものも見つきたいですね。(洲崎)



12月21日 (火)

地元の方々と矢作川の歴史についての勉強会をしております。現地へも写真を撮りに行ったりしますが、時折寂し

く思われることがあります。古墳は打ち捨てられ、神社は開発で跡形もなく、美しい石垣は竹藪に埋もれています。人々が生活する中で、変わらないものはなにもない、だからこそ、記憶のありかだけでも確かにしていきたいと思わされます。(高橋)



大高山古墳群
(豊田市平戸橋町)

編集後記

今月は図らずも“我が家の庭自慢”特集になりました。市街化が進んでいる豊田市ですが、素晴らしい庭を育てている方が沢山みえるようで、少し安心しました。研究所では「川をいかした街づくり」事業を進めています。川沿いの自然や郊外の自然を街の中へ導くためには、緑地公園や散策道などの整備だけでなく、みなさんの庭の自然を繋げることが最良の方法ではないかと提案しています。みなさんも“アサギマダラが飛ぶ庭”を目指して、庭作りを始めてみませんか。(白)

豊田市矢作川研究所

〒471-0025
愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860
FAX 0565-34-6028
E-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

Rioは再生紙(100%)を使用しています。